

支那の青銅器時代に就いて (中)

梅 原 末 治

四

現存支那の銅利器中に他の古代文化世界の遺品に較べて特色の著しいものがあると見る如上の推論が認められるとすると、青銅器時代の考究上、次に是等の行はれた時代が問題となることは更めて説くまでもなからう。處が既に指摘した様に吾々の取扱ふた資料の殆んど全部は、出土の地點すら明瞭でない考古學上からすると價値の低い游離した遺品である爲に、其の考定が現在に於いて極めて困難な状態に置かれてゐる。尤も現存の支那式銅劍のうちに時代が周の後半に屬すると考へられる類があり、周末漢初と認む可き若干の銅斧も存し、また特色ある銅戈のうちに秦始皇の紀年を刻した遺品のあつたことは、器自體の製作年代を明示するものとして注意を惹くが、其の後者は中で最も確實な朝鮮の樂浪郡時代古墳地帯出土の一例の示す處、^①戈の形態として發展の頂點に達したもので、「内」端にも刃を附してある點から、支那の一部學者の載とする式に當り、銅の質料また利器として必要な強靱の度に缺くるところの白銅から成つてゐる。されば樂浪の遺跡から他に銅戈の出土例がなく、利器は同じ

系統の戟を始め、すべて鐵製である事實と併せて見て、如上の戈の示す年代の一點は、銅利器の下限に當るものと解す可く、そのみでは固より他の諸形態の行はれた年代等は判じ得られないのである。こゝで傳殷墟の出土品のうちに同式の銅利器のあると云ふことが、其の或物の分析せられた結果錫を含んでゐない事實と表裏して、右の初期の年代觀に規準を與へるとする一部學者の論述が顧みられることになる。

河南省彰德府附近の傳殷墟から銅利器の出土することは、李濟博士等の發掘調査の結果明にせられてそれに關する氏の論文をも見たことであるが、時に戈にあつては古式の類が攪亂されない伸展葬の人骨と伴出して興味を高めた。^③併し博士の集めた資料其他からすると、此の戈にあつては實用の利器たるにふさはしい形態のものよりも、「内」に饕餮文を鑄出した裝飾化せる遺品や、氏の銅製明器と呼んでゐる形の全く便化した扁平な假器が多數を占めて居り、自餘の利器例へば矛の如きも亦同じ傾向を示して、上述錫分を缺く成分の器が主として右の類であると云ふ事實は、別にそれに多量の鉛を加へてゐることゝ相待つて、よし遺跡を以て殷代の後半とすることが認容せられ、また問題の遺物に私の嘗て説いた假定が適用せられると^④しても、それが該利器使用の初期を示すとする論述の甚だ穩かならぬことを思はしめるのである。一部論者は傳殷墟に於いて多數の明器的な古式戈や矛の類を見るが、同時に古式な實用に堪へる戈(瞿・弒)もあるから、兩者を區別する標準のない現在では、これ等を一括

して殷墟式と命名す可く、以て當代一般に同種の利器が行はれことを想定すべきであると云ふ。併し理論上からすると、利器の如きものゝ裝飾化乃至其の明器化は、それが外から齎された場合以外では實用の器の後に發生するものであつて、特に此の殷墟出土の古式戈に見る「内」の獸形裝飾から全く便化し去つたものゝ如きは、身の扁平な點と共に、實用の眞の利器から、これに至るまでは少くも幾つかの形式段階が豫想せられるものであつて吾々の現在知つてゐる遺品の形式の上にも既掲の圖の示した様に、それに相當する形態のものが見出される。されば戈を以て支那に於ける特色ある利器とする立場からすると、殷墟に二者の同時並存は認めるとしても、かゝる裝飾化乃至明器の發生に先立つて、實用の同種の利器の行はれた時代があつたとする想定は動かかないと思ふ。

早く一の假定として説かれた河南省殷墟の示す文化段階を以て石金過渡期にありとする見解は、今以て一部人士の間に信せられてゐる様に見えるが、李濟博士等の發掘に依つて出て來た種々の遺物からすると、遙かに進んだ文化段階にあることを示すものが多い。層序が攪亂されてゐる點から、いま直ちに李博士の『安陽發掘報告』第四期に説いた是等の性質觀を其の儘採り難いとするも、また到底かゝる原始的な状態にあつたとは認められないのであつて、梁思永氏の新たに小屯に近い後岡の發掘に於いて得たと云ふ層序の状態を信す可しとすれば、一層其の然るを覺ゆるのである。これを實物に就いて見るも、早く羅氏の蒐集した雕牙骨器、青石を嵌入した饗餞文のある銅片の如き、また特色あ

る白色土器片の如きは、其の後續出した同じ類や、銅器片等の示す手法と共に、其の上に尊彝と同一の完成した特色が表はれて居り、而も牙雕骨片の如きは文字を刻した龜版獸骨類と連關することが充分考へられる。處が上述の銅戈の類は上述の銅片が古式戈の「内」^⑧であることを確め得たなどと併せて、また同じ群に加ふべきものなのである。

今改めて現存の銅戈、銅戚の類を通觀するに、中に利器として實用に適したものが固より多く、其の戈にあつては瞿・戮など呼ばれてゐる古式の戈から戈・戟に至る利器としての連續した發展の段階を辿り得るのであるが、他面に於いて、一部に裝飾を加へたものや、それが著しくなつて、形も複雑化し實用から遠ざかつた遺品のまた少くないことが擧げられる。上述傳殷墟出土の明器に見る全く形式化した類の外に、銅戚に特に右の著しい類があつて、第三圖に例示した遺品の如きは、孰れも身にまで繁褥な裝飾が施され、外形は利器であり乍ら、器自體は全く表飾的なものとなつてしまつてゐる。尤も現存遺品に此の種の戈・戚の多いのは、本來吾々の據つた資料が美術骨董品として集められた爲であること言ふまでもないが、それにしてもかゝる類の存在することは、もと日常生活に必要缺くべからざるものであつた利器が、時代の進むと共に一種の「シンボル」となつて、其の民衆の間に重要視せられたことを物語るものであり、兼てまたそれに印した圖文の性質から、眞の考古學的資料の乏しい今日の場合、問題に上つてゐる器の年代考定の上に一の據所となるべきを思ふのである。

さて此の種の利器の上に鑄出された裝飾文は精粗種々な類を存して固より一樣ではないが、それ等は孰れも所謂三代の尊彝を飾る圖文と同じ奇怪な動物文の範疇に入るものであつて、既に指摘した様に、其の最も複雑な式に於いて、銅器に表はれたと同一の繁褥にして標式的な饗餞テイヒカル乃至虺龍文を見出すのであり、また上述の殷墟出土の雕牙骨片の圖文とも合致する。なほ器に時に見受ける銘にあつても、發達した戈等に於ける刻銘を除くと、裝飾文と連關して「内」に存する鑄銘は、通じて古銅器文の最も古拙と言はれてゐる記號的な類と一致してゐることが認められるのである。然らば實用から遠ざかつた利器の出現が、かゝる尊彝なり、雕牙器と並行してゐたと解す可きことになる。此の解釋は一面に於て自ら同種の實用の利器がそれよりも先立つ時代もあつたことを察せしめるし、また他面で並存した尊彝の年代が確められるならば、引いて利器の年代をも推し得べく、銅容器と利器とが結びついて、支那の青銅器時代の性質が通じて考へられ且つ體系づけられるであらう。こゝで尊彝の性質特に年代觀が新に問題に上つて來る。

註① 藤田・梅原・小泉『南朝鮮に於ける漢代の遺跡』、『朝鮮總督府刊、大正十四年』、關野博士『樂浪郡時代の遺蹟』、『同上、昭和二年』等參照。序に附記するが東京中村不折氏の所藏する秦始皇廿九年の銘ある戈(『周漢遺寶』所載)また樂浪出土品と同じ形式のものである。

② 李濟博士『殷虛銅器五種及其相關之問題』、『慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』上册所載)

③ 同『俯身葬』、『安陽發掘報告』第三期)

④ 上引道野鶴松氏の論文並に別に京都帝國大學理學部の小松・山内兩博士の分析の結果に基く。此の後者に就いては他日詳しい

報告書を公刊する豫定である。

⑤ 梅原「殷墟白色土器の研究」『東京文化學院京都研究所研究報告』第一冊（第八節參照）

⑥ 此の點は既に濱田博士も今京都大學に藏する象牙骨片や白色器片を紹介せられた際に説いてゐられる。同博士「支那古銅器研究の新資料」『國華』第三七九號所載、『東亞考古學研究』収録、參照。

⑦ 梁思永氏「後岡發掘小記」『安陽發掘報告』第四期）

⑧ 梅原「傳殷墟發見の銅製品に就いて」『史學』第八卷第四號）

⑨ 更に詳しく言ふと、戈の系統にあつては古式のものに歸た記號的な銘を主とすること成の或物と同様であるが、此の類では形式の發展に並行して、往々後に述べる尊彝の銘文の變遷に應じた銘を有する遺品を見受け、以て上記の秦時代のものに及んでゐるのである。

五

所謂三代の尊彝は漢代銅器と並んで支那古代銅容器の大本をなす所のもので、宋代以來器愛玩の風潮につれて、早く一部學者の注意に上り、清朝になつては考證學の隆盛と共に器の款識に對する研究が大いに興つて、關係の文獻は汗牛充棟と言ふてもよい有様である。併し從來の學者の研究は殆んど銘文の解釋に限られ、また器を以て祖廟の寶器、饗燕の器等とする關係から、古禮經の記述と對比して名稱用途等を攷へる所謂器名の學に終始し、其の結果として嚴密な意味の上では、大系づけられた年代觀や、より廣い見地からする器の性質などが如きは殆んど確められてゐない。

一體此の種の銅器は古く出た『博古圖録』や『考古圖』等が既に明示してゐる如く、其の器形は土器等に見るよりも遙かに嚴肅複雑なものが多く、又これを飾る圖文は饕餮龍等の奇怪な浮彫的文を全面に現はしてゐて、全體として與へる印象が如何にも非實際的な奇異にして繁襍なものである。そこで支那の學者は其の用途に就いて、古典に散見する所に基き、寧ろ日常の器でなく、禮樂に供したとなし、それを

(1) 尊にて總括せられる所謂盛酒の器

(2) 爵なる總名を持つ飲酒の器

(3) 烹飪の器たる鬲・鼎の類と、黍稷を盛る敦・彝類

並に樂器に大別し、更に一々の形にそれ／＼の名稱を與へてゐる。いま試みに其の主なるものを數へると第一類に尊・壺・甬・甌・卣・觥・盃等があり、第二の飲酒の器では爵・觚・觶・角・斝等を擧ぐ可く、第三類では鼎・鬲・甗・敦・彝・簠・簋・豆等が其の主なるもの、また樂器には鐘・鐸・錚・鐃があり、なほ別に盤・匱等の沃盥の器もある。①

是等の器の年代に就いては、支那の金石家は其の款識からして商(殷)器と周器とを比較的容易に區別し、周器なるものに對しても、銘文の内容から更に局限せられた時代考定の可能を信じてゐる。此の解釋は一は銘辭の體に依り、他方内容の研究から來たものであるから、うちにそれ／＼傾聽すべき

成果を含んでゐる。併し實際からすると、所謂尊彝には後の漢器に於ける様な絶対不動の實年代を示すものがなく、また其の器の性質上から銘辭が或る類に限られて居つて、器に依つて同式の銘のみを附したと思はれるもの等もあるので、年代を推すに不充分であり、人に依つて解釋を異にするなどして、未だ俄かにそれのみに據り難い。一例を擧げるならば、爵の如きは支那上代を通じた廣く行はれたことを古典から推し得るが、右の銘辭の解釋からすると古拙な體が多くて、殆んど商器に限られたことになる。かゝる矛盾は近頃では支那の金石學者すら氣付き出してゐるのである。

更に遡つて考を廻らすに、銘辭はそれが陽鑄である場合は明に器と同時のものゝ認められるが、銅器に常に見る識即ち陰文の銘にあつては、鑄銘の外に器成つて後隨時刻することが出来るから、其の銘を以て器本來のものであるとするのは此の點を確めなければならぬ筈である。殊に支那の如き文字を尊重する國に於いて、銘文ある器の愛玩珍藏せられる場合、古い無銘の器に後にそれを附加することは容易に考へらるのであつて見れば一層其の感が多い。これを實際に徴するに、古器に出土後新しく銘を追刻した例を少なからず見受けるばかりでなく、最近海外に流出する多數の新たに發掘せられた銅器にあつては、無銘の器が相當の數量に上つて、確實な鑄銘の器に相比すべきものがあり、^③出土後傳古した從來の器の殆んど有銘であるのと差異を示すが如きも、後者のうちに後の追刻の少くないことを暗示するものとしよう。然るに從來の銘文からする研究に當つては、其等の點に關する周到

な注意を缺き、器と銘と不可分のものとして、現存の銘から直ちに器の年代を推し、其等から銅器の年代觀を組立てゝゐるのは、銘に年代を明示するものが多い場合でも危険を伴ふ。云はんや三代の尊彝が銘文自體にかゝる明確なるものを缺くに於いて、其の直ちに據り難いことは自明である。支那の著録に往々見受ける所の同じ器形乃至圖文であり乍ら、一を商器となし、他を周器とする矛盾した年代觀は、單に外形を無視したばかりでなく、銘文自體に對するかゝる省察を缺いたに因るものがあらう。吾々は近時西歐學者の銅器の觀察が美術史の見地から寧ろ右の銘辭を離れて、器形なり圖文のみに重點を置く傾向に雷同する者でなく、銘文の有する價值を信する次第であるが、形なり圖文が尊彝の缺く可からざる構成部分をなす以上、研究にはそれが又重要視せらるべきであつて、考古學上の根本資料の極めて乏しい現在に於いては、先づ確實なる器の撰擇を第一條件とし——これを條件とせなければならぬ程支那の銅器には模古の遺品乃至贗作品が多いのである——銘文に就いて如上の點を確め、然る後に器形、圖文、銅質、銘文等器のあらゆる部分に對して考察を行ひ、其等の集積の上に新しく古銅器の性質觀乃至年代觀を組立つべきであることを私かに信ずる。次に項を改めて如上の見地からする過去數年間の調査の成績に基く所謂尊彝の形式觀を擧げるであらう。

註① 是等を簡明に記述したものに容庚氏の「殷周禮樂器考略」(『燕京學報』第一期)がある。またシレン博士の『支那古代美術史』第一卷(Oswald Sirén: A History of Early Chinese Art, Vol. I. (London, 1930))等にも概要を載せてある。

② 今一二の例を挙げると、我が住友男爵家、根津嘉一郎氏、米國華府フリア美術館に各一器を藏する同形の有蓋龍鬚釜文鼎（壺）のうちで、フリア美術館の遺品にのみ長文の刻銘があつて、それが偽刻と認められるが如き、また同じ米國紐育のメトロポリタン博物館と費府の大學博物館と共に一器を藏する同形の犧首鬚釜龍文鼎に於いて、前者に後刻の古い銘のある如きを著しいものとする。なほ早く『山右金石志』に著録せられ、王國維氏が「攻吳王大老鑑跋」、『觀堂別集』を書かれて有名な蟬螭文銅鑑の如きも、實物の示す所では器が古くない上に、銘は更に後に刻した形迹の明なものである。

③ 梅原「支那古銅精華」第一・第二兩册參照。尤も此の無銘の器は一方器形に依つて多いのと少い類とがある様に思はれ、また時代にも關係がある様な點も見える。是等は或器に或種の銘の多いことなど、共に將來多數の資料から明にせらるべき一つの點と思ふ、參考の爲附記して置く。

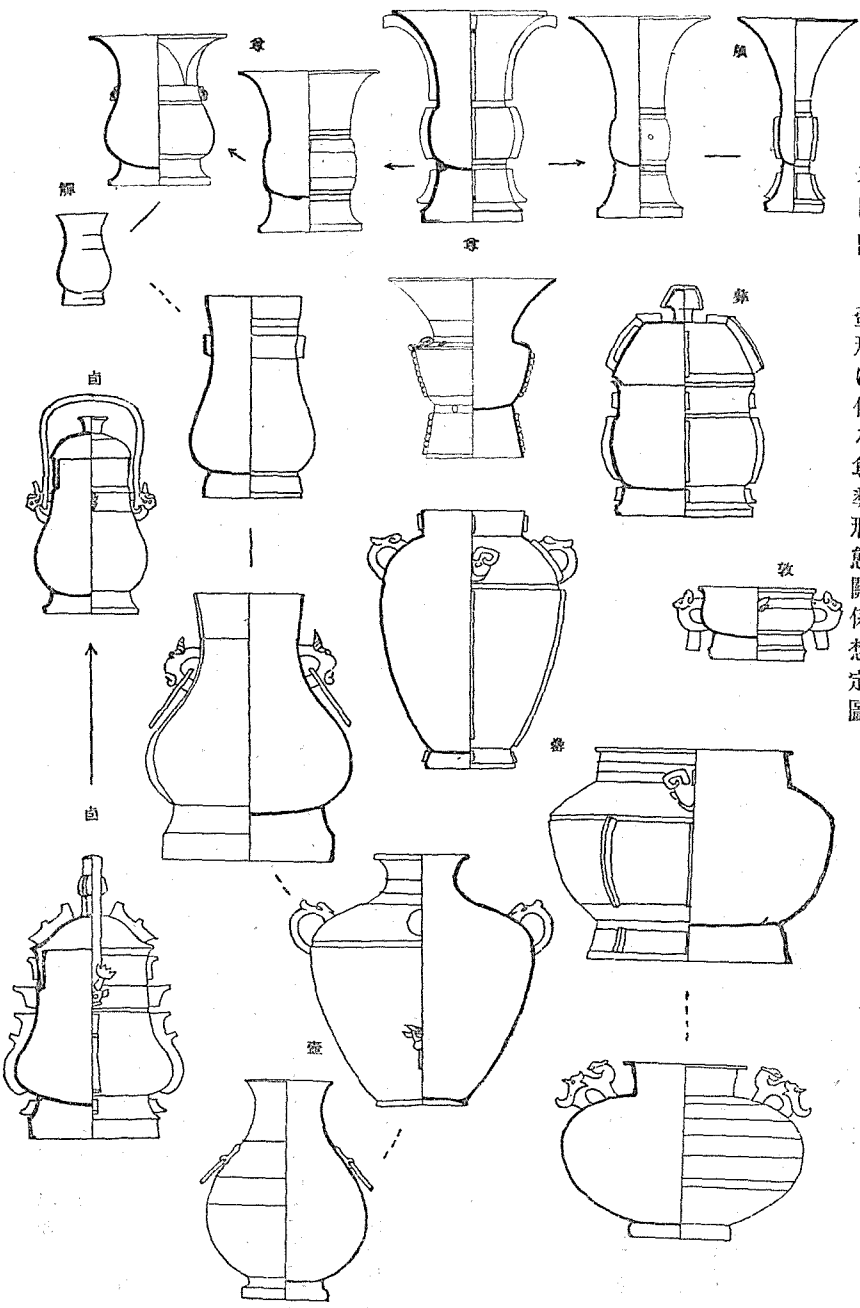
④ 尤も從來の金石學者も偽刻の銘のあることには、それ／＼に注意を加へて居る。近く發表の商承祚氏の「古代彝銘偽字研究」、『金陵學報』第三卷第二期の如き専らこれを取扱ふたものもある。併し器との關係には及んで居らぬ。

⑤ 容庚氏「寶盞樓彝器圖錄」等參照

六

先づ尊彝の形態に就いて見るに、上に挙げた多數の器には可なり變つた形をしたものを含んでゐるが、烹飪の器たる鬲にあつては、同じ特色のある形を支那史前の土器に見出して、兩者の連系が考へられると共に、それから鼎・甗への形の發展が推されるのであるし、^①また容器として普遍的な壺を基準形とした器が可なり多く、他方未開人の土俗に見る竹器・角器等から推して、基くところのかゝる類であることを推測せしめるものも存し、其の點で器の名稱が尊彝で總括され乍ら、小共名があり、更

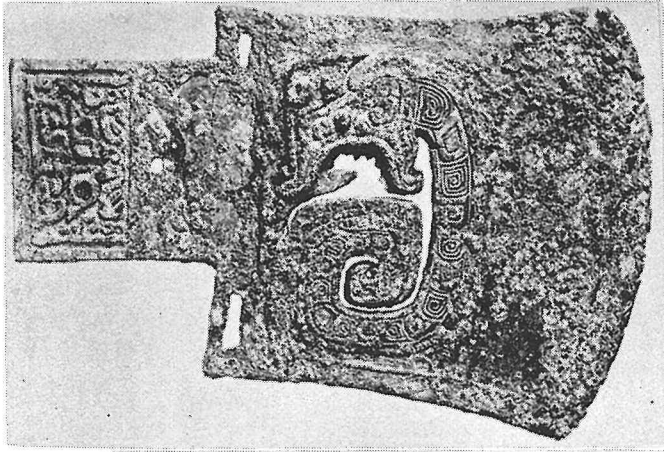
支那の青銅器時代に就いて(中)
 第四圖 壺形に依る尊彝形態關係想定圖



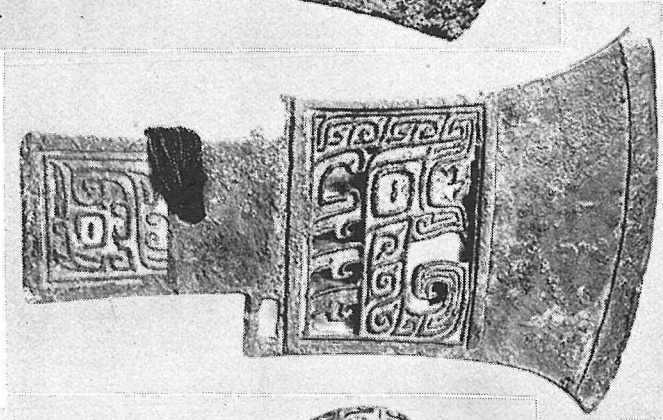
第二十卷 第二號 三五〇

第三圖 古式雕文戚三例

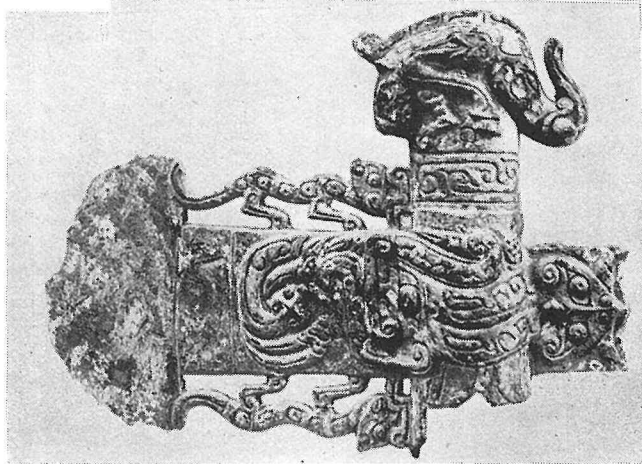
ガットマン氏保管品



武内金平氏藏



レーフエル氏藏



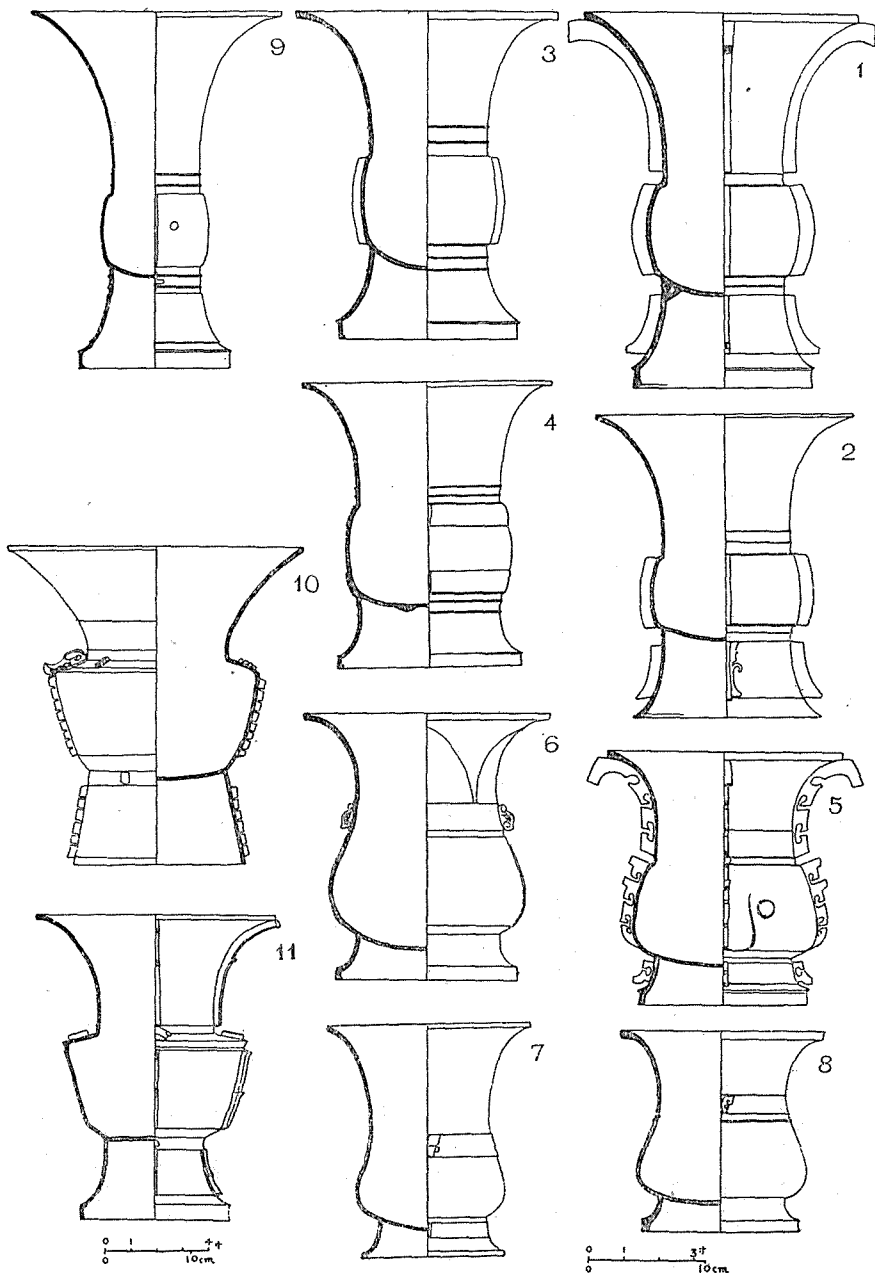
第五圖 銅鼎諸形態圖



左上(1) シカゴ美術館藏
 左中(3) 黒川幸七氏藏
 左下 戰國秦式

右上(2) 嘉納治兵衛氏藏
 右中(4) 黒川幸七氏藏
 右下 漢器(朝鮮出土)

に據る所を推し得る專名を持つてゐることと併せ見るべきものがある。併し現存の多數の銅器は、其の裝飾的な奇怪な獸文を暫く除外するとしても、現在他の質料で作られた器と直接な連系を認め得るのは鬲・豆等二三に限られてゐて、其の多くの形は特殊なものであり、壺の如きも支那人の鬮足と呼んでゐる器臺が附加せられて、土器に普通見る形態との間に差異がある。いま試みに此の壺を中核として器形相互の關係を考へると、大體第四圖に擧げた様な連なりが見出され、壺自體の間にあつても若干の違つた基礎形とも云ふべきものが認められる。處がかゝる形態の連系圖を作製して見て、注意に上る一つの點は、同じ壺の形ではあるが、銅器にあつては個々の形の固定化が著しく、上記の基礎形相互の間をはじめ自然的な推移を示すものに乏しいことである。これは現存の資料に則する限り、是等の器が銅に移される以前により、通有な壺から分れて、用途に應じてそれ／＼に右の形態を生じてゐたことを暗示するものとしよう。同じ事は角の類から導かれたとする器形、例へば兠觥・角・爵等に於いても言ひ得るのであつて、相互に親しい脈絡なく、單に觥から匱なる器への形の推移が考へられる外角・爵共に角器とは可なり違つた形態をして、其の形が全く固定してゐる。従つて銅器では他の質料で作られた器形との關係や、また器相互の連なり等から形態觀を立てるには相當の困難を伴ふ。かく尊彝の個々の器には、それ自體の形に固定化の傾向を見るのであるが、併し他面では一つの專名の器中に種々形の差異ある類が存して、銅器の形として成立してから後の變遷を辿り得る可能性を示



圖態形種各尊 圖六第

すものも少くない。此の類として先づ擧ぐ可きは鬲から系統を承けたとせられる鼎であり、更に尊・卣に於いて著しく、所謂敦、盃、兕觥等にあつても同様な點が認められる。尤も是等の實際は多數の確實な遺物の聚成圖コルプスを作つて後にはじめて正しく指示し得るものであつて、今日はなほ其の時期に達してゐない。併し例へば鼎にあつては大體第五圖の様な類の存在が注意せられ、尊には第六圖に示す様な諸形態があり、卣また故トリュブナー氏(Jörg Trübner)の類聚した様な種々の遺品②を存してゐる。而して尊と卣とは伴出する場合が少くないので、是等から個々の形態の推移の外に、兩者を通じての序列を考察するの見込がある。此の點からすると盃また下半部の形に於いて、鬲から鼎への形態推移に相近い變遷を示して併せ觀るべきものがある。今如上の類に就いて形式學上から先後の配列をして見ると、大體に於いて孰れも嚴肅にして複雑な器形から、それが段々と實際化して整美なものに至る段階に屬するものであつて、此の後の形態に於て所謂秦銅器——以下戰國秦樣式と呼ぶ③——への連なりが認められる。

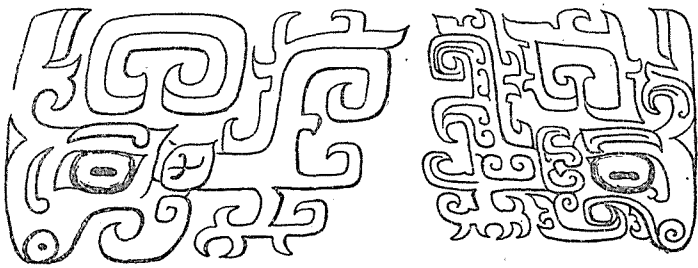
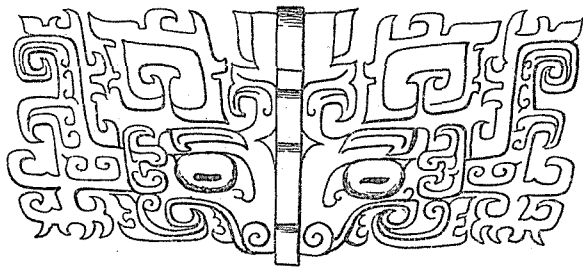
支那古銅器の形態は早く宋代人が指摘した様に、漢器になると著しく形を改めて、所謂尊彝の類は概ね迹を絶つてゐるのであるが、中で鼎の如き時に殘存する器形にあつては、戰國秦式の後を承けて、所謂三代の鼎からの一つの永い形態列の明な下限を示すものがあり、一部人士の漢卣とする提梁のある壺形の漢器また、中間に戰國秦式にある同形の器を置く時は、卣の長大な整美な類との連系が同じ

く考へられる。即ち如上の尊彝の或類は、形の相對的年代に於いて、複雑にして奇怪なるものが古く、形の實用的な整つた類が後に來ることになるわけである。

尤も所謂三代の銅器のうちには甗や簠等の如く、現存遺品からすると比較的實用に適した形のみのものや、又た初に記した爵・角・罍・觶の様に嚴肅にして特色ある形のみの変化に乏しい類があるので、尊彝全體の形式觀を考へる時に、是等のものと上述の類との關係が一の問題になるわけであるが、爵・角・罍等は戰國秦式に於いて全く迹を絶ち、飲酒の器として全く別な形の杯——椀等が行はれ出し、漢に至つて盛行してゐる所^④を見ると、奇古な形態の角・爵などは上記系列の初の段階と並行したものとすべく、また甗や簠は戰國秦式に相似た形を存することから後出の器と解せられる。然らば同じ專名の器中に於ける違つた形の多い是等の諸器に於ける形態の推移は注意すべき事象として、一面それが固定化の傾向ある銅器に於ける現はれである所から、其の變遷に相當永い時間的な経過のあつたこと^⑤が自ら考へられるのである。此の場合近時新資料の續出に依つて、漸次其の行はれた年代の明確になつて來た戰國秦様式——所謂秦銅器——から漢器への推移に三四百年の年時を要したと云ふことが思ひ併されるであらう。

次に尊彝を飾る所の文様を取り上げて見る。それは饗餮・虺龍・夔鳳・夔龍等と云ふ奇怪な動物文と雷紋とに依つて特徴づけられたもので、殊に饗餮文が目立つてゐて、恰も裝飾の中核をなし、之に従

屬して他の文様が適用せられた観がある。此の饗餞文の起源に就いては種々の見解が並び行はれて今日なほ定説がなく、^⑦それが餘りに特色の著しい所から、地文たる雷文と共に考察上の難問題としてこのされてゐる。併し銅器に於ける此の圖文の適用からすると、其の文様は恰も動物の頭部を中心にして左右に展開した如き形を取り、また周圍から見ると、裝飾たる關係からでもあらうが、右の圖文の左右が同時に別々に一の單一圖形をなしてゐる——私は假りにこれを正側面の同時表出法と呼ぼうと思ふ——



第七圖 饗餞文表出法圖解

處に一の特徴があり、其の點で大洋洲北、アメリカ等の未開人の間に見る動物文南露のスキタイのそれとは違つてゐる。(第七圖)

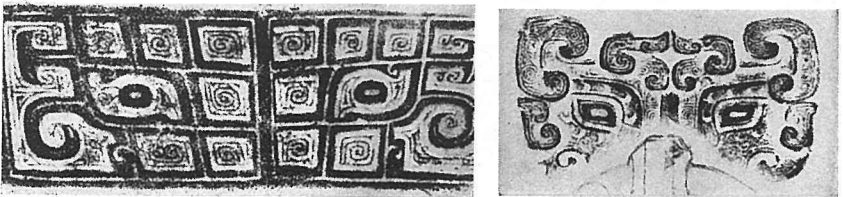
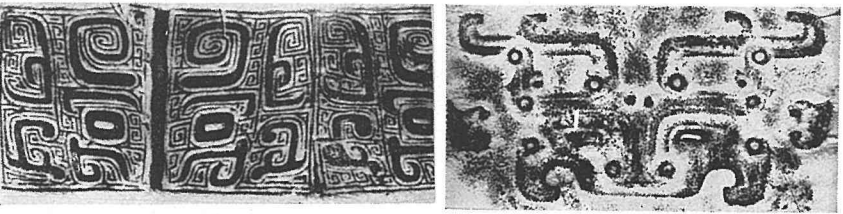
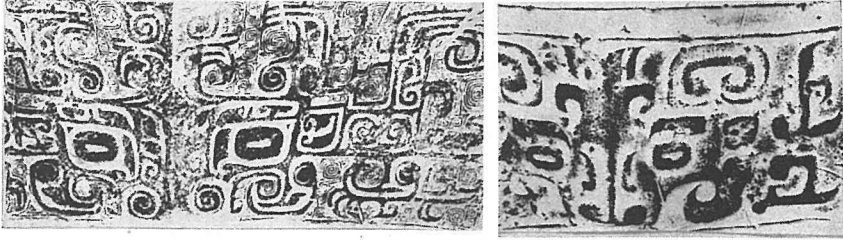
併しあらゆる器の裝飾として用ひられてゐるだけに資料も多くて、其の間に於ける差異がまた認めらるゝ。さて此の饗餞文は各種の尊彝を通じて割合に變化に乏しく、器形の固定化と共通した傾向を示すが、

る。即ち浮彫的で上述の形態をよく示した奇怪なものが多い他面に、各部の表現の線的となつて雅致を加へたものや、四肢が便化或は消失して顔面のみが著しくなつた類から、更に其の目耳のみが象徴化せられて、他が雷文化したものと等があり、是等の間から文様の推移を考へることは不可能ではない。

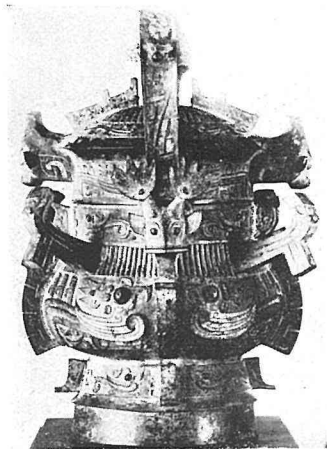
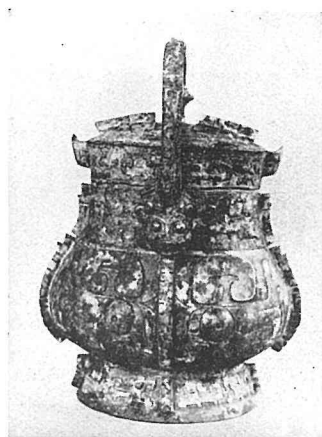
形式上部分の省略せられ、或は一部の象徴化したものが全體的な形の後に來ることは明であるし、他方戰國秦式銅器の或物に見る獸面や、所謂蟠螭文の或類は右の顔面のみを饗養文との連系が考へられるものであるから、詳しい變遷は將來に待つべきであるとするも形式の順列は繁褥な正側面の同時表出のものから、次第に四肢が便化消失して地文化して行くものと、顔面だけがのこり、それが遂に純粹の獸面に移行した二つの流れが見られるのであり、従つて浮彫的で而も特色ある奇怪な類が最も古いことになる。(第八圖)

饗養文と共に多い虺龍文にあつては、所謂Z字状をした双頭文をはじめとして割合に違つた類が各種の器に用ゐられてあつて、これは前者よりも明確に圖文の變り方が分るし、なほ次の戰國秦式銅器文を特色づけてゐる蟠螭文の系統を引く點で興味が多い。私の企圖してゐる三代古銅器文の調査考察は、確實な遺品に就いて、あらゆる文様を摘出し、その同じ類を集めて先づ形式の前後を推定し、然る後に文様相互の關係を辿らんとするにあるが、以上の著しい二例其他既に若干の稍々纏つた資料を得たものに於ける所見は大體に於いて同一の推移を示してゐるのである。

第八圖 饕餮文變遷推測圖



第九圖 卣形式變遷例

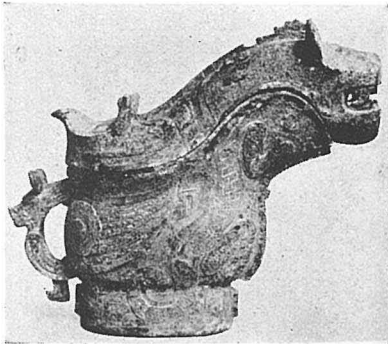


右(2)根津嘉一郎氏藏
左(1)フリア美術館藏

右中(4)オペンハイム氏藏
左中(3)ホストン某氏藏

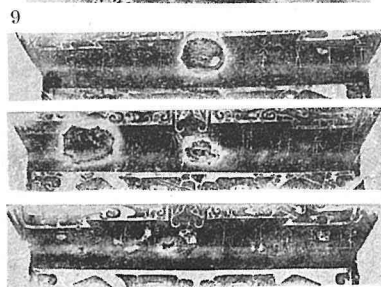
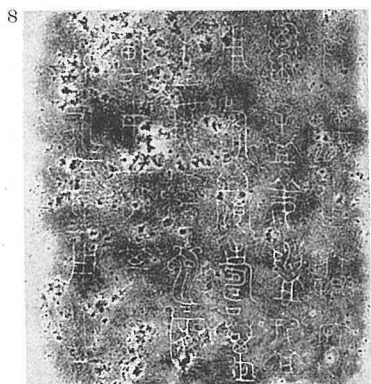
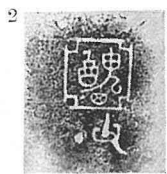
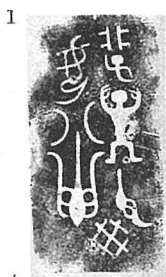
右下(5)山中商會保管品
左下(4)住友男爵家藏

第十圖 兕觥形式變遷例



左上(1) マイヤー夫人藏
左中(2) 住友男爵家藏
左下(4) 川合定治郎氏藏

右上(3) ホーム夫人藏
右中(5) 山中商會藏
右下(匜) ホストン某氏藏



(1) 缶器銘 (2) 鼎銘 (3) 尊銘 (4) 鬲彝銘 (5) 敦銘

(6) 簋銘 (7) 盤銘 (8) 盤銘 (9) 鈎刻銘

1-4 古期 5-7 中期 8, 9 戰國秦式

こゝで別々に其の形式を考査した形態と文様との示すところを併せて見ると、形の嚴肅にして非實際的なものに浮彫的にして繁褥な圖文が多く、より輕快な形に雅致の趣を加へた圖文が附されて居ると云ふ並行状態が認められる。而して後者にあつては文様が單に器の裝飾として一部に施されたに過ぎない場合の少くないのに對して、前者の器では圖文が概ね器の全面を覆ふて、兕觥乃至敦の或物では、それが器形の部分をすら構成すると云ふ有様で、兩者が殆んど不可分の關係に立つて、特色ある器體をなしてゐるのを見受ける。すると現在の所謂三代の銅器では最も嚴肅な形に繁褥な裝飾を以てしたものの、換言すると尊彝として標式的なものが形式の上からは最初に來、それから漸次形態圖文共に輕快實際化する傾向を取つたと見なければならぬ。かくて戰國秦式銅器や漢器は此の系統を承けたものとして、よしや漢器には器形圖文に全然新しい分子が多く加はつてゐるにせよ、從來對蹠的に扱はれた所謂三代の器と漢器との形式上の連鎖が充分に理由づけられることになつて來る。いま如上の歸結を卣と兕觥との二器に例を取つて圖示したものが第九・第十の兩圖である。圖中卣にあつてはフリア美術館藏する遺品、觥では華府マイヤー夫人の藏器の如きが、形式學上古い段階に屬し、山中商會所藏の卣や、有臺觥の如きが新しい形式として、其の間に中間的な形式が來るのである。

註① 濱田博士「鼎と卣に就いて」、『狩野教授還曆記念』支那學論叢』及『東亞考古學研究』所收

② Jörg Trübner: *Yu und Kuang* (Leipzig, 1929).

支那の青銅器時代に就いて(中)

第二十卷 第二號 三五七

- ③ 梅原「所謂秦銅器に就いて」、『史學』第十卷第三號)參照。此種様式の銅器に就いてはシレン博士は楚秦式と呼び、また瑞典では淮河式(Huai-Sze)なる名稱が興へられてゐるが、其の後資料の續出に依つて、行はれた年代並に地域が餘程はつきりして來たから、新たに戰國秦様式と命名することにした。詳細は近刊の東方文化學院京都研究所の研究報告に盡すであらう。
- ④ 濱田博士「爵と杯」(市村博士古稀祝賀『東洋史論叢』所載)
- ⑤ 此の器形の變遷なり、新形態の出現に就いて更に考察を進めるには、當時銅器と並存して、より一般に行はれてゐた土器からの影響を顧みるべきであることは言を須ひない。此の點に關しては既に早く濱田博士が「支那古銅器と土器との關係に就いて」(『東洋學報』第七卷第二號)なる示唆の多い論文に於いて相互の關係を説かれてゐる。
- ⑥ 徐中舒氏「區氏編鐘圖釋」(William C. White: Tombs of Old Lo-yang (Shanghai, 1934) 郭沫若氏『古代銘刻彙攷』同續編 唐蘭氏「壽縣所出銅器攷略」、『國學季刊』第四卷第一號)、劉節氏「楚器圖釋」等參照。
- ⑦ 濱田博士「支那古銅器研究の新資料」(前出)、同「支那古銅器概説」(『刪訂泉屋清賞』)、石田幹之助氏「饗發紋の原義に就て」(『考古學雜誌』第十八卷第四號)等參照。
- ⑧ 此の點からすると正側面の同時表出法は古式な圖文に於ける特徴とも見られる。一體饗發文のみでなく、銅器の繁樛奇古な圖文にあつては、單位圖形を二つ相向はしめて饗發的な一つの圖文をなした點で此の種の範疇に入るべきものが少なからず存してゐる。倫敦ユーモルフォロス氏所藏の象文周公彝(『古銅精華』第二册(三圖)、椗禁中の犧首饗發風文卣(同上第二册三圖)の器腹文等の如きは其好例である。

七

銅器を構成する形態と圖文とに就いての右の形式學上の考察に較べると、款識は孰れの器にもある

ものではないが、支那の金石學者が其の主な研究の對象として、據つて以て器の年代を推してゐることは改めて述べるまでもない。併しそれも既に指摘した様な闕陥があるとすれば、更に本に遡つて新しく考察を試む可きである。いま吾々の見得る確實な器に於ける鑄銘類を主な資料とし、これに信す可き若干の刻銘を加へて、同じく考古學上の立場から觀察して見ると、注意に上る一つの重要な點は、銘文の書體の一樣でないことである。其の違つた書體を取つて試みに形式の先後を辿つて見ると、大體第十一圖の様な順序となつて、一部支那學者の般文字と呼んでゐる單なる記號的な象形の文字から或る内容を持つた長文のものに見受ける若干の段階につゞき、最後に戰國秦式の刻銘が來る。處が右の書體の系列を原器に復して見ると、或る書體の銘が或る種の器に多い場合のあること、例へば記號的な單文の爵に於けるが如きものもあるが、大體に於いて記號的である象形文は嚴肅にして繁褥な圖文の器に多く、また長い銘文でも體の奇古なものは、例へば象文彝、所謂吳彝の如く同様な器に存して、以下書風の變遷と上述器形圖文の推移との並行が認められる様である。然らばそれは郭沫若氏が舊説未だ儘く信す可からずとして、なほ現在吾々の調査の及ばない銘文の内容から其の變遷を論じてゐる所説にも略ぼ合致するものがあつて興味を感ずるのである。

郭氏の説は「周代彝銘進化觀」^①と題して、古代尊彝の銘文に四個の段階のあることを説き、其の第一は銘文の生じた際のもので

僅在自名自勒其私人之名或圖記以示其所有

の段階であり、それが文化の遞進に依つて次の

此階段之彝器與竹帛同直古人之書史矣

なる程度に達したことを實例を擧げて論じ、西周の遺器を以て其の最も著しいものとしてゐる。處が春秋中葉以降變じて

東周而後書史性質變而爲文飾

なる第三段及び第四段たる

復返於粗略之自名或委之於工匠之手而爲物勒工名

となつて遂に廢滅したとするのである。右の見解は氏が『兩周金文辭大系』を編述した際考へ及んだ所であると云ふ。同書所收の器銘の年代に既に異論^②があり、また吾々からすると、資料の撰擇に全く議すべき點がないこともないから、それを實年代と結びつける所には直ちに據り難いが、而も大體の變遷觀に至つては固より傾聽すべきものとしよう。して見れば銘文では書體内容を通じて器の場合とは違ひ、發生の初期からの發展推移の全過程が表はれてゐる事になる。(未完)

註① 此の論文は郭氏の『古代銘刻彙攷』の卷末に收録されてゐる。

② 吳其昌氏「金文厥期疏證續補」同「金文疑年表」、《北平圖書館館刊》第六卷第五號—第七卷第五號等參照